明百景

望遠鏡で楽しむ月文学

〇40

虹の入り江　溶岩平原に光差し…

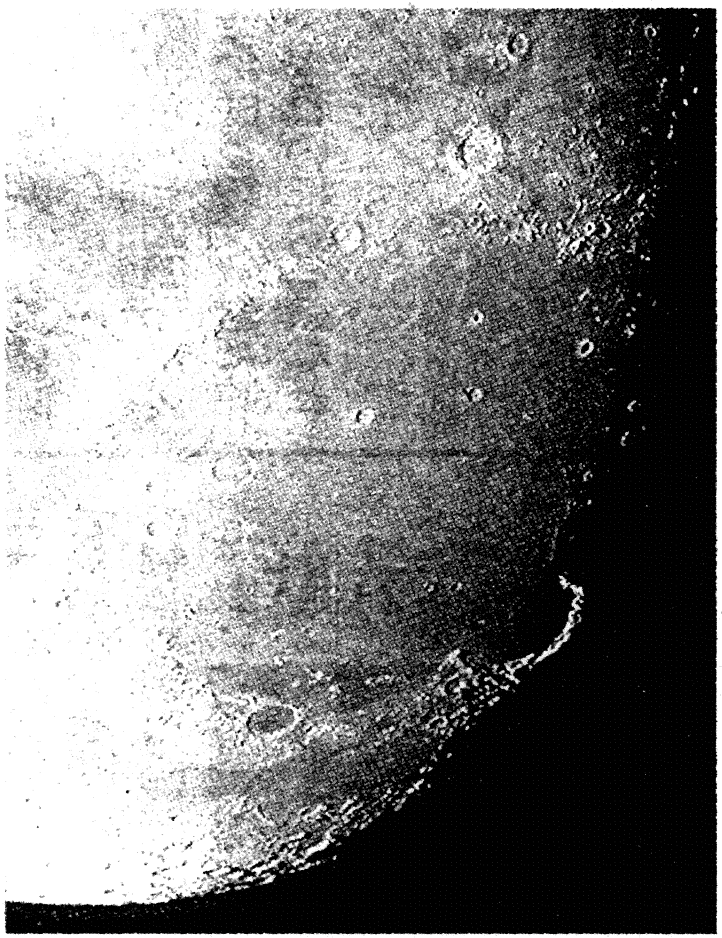
「めぐり逢ひて　見しやそれとも分かぬ間に　雲隠れし　夜半の月影」（紫式部「百人一首」）

久しぶりに会えた幼なじみがすぐ帰ってしまった名残惜しさを、雲に隠れてしまった十日の月で比ゆ的に表現した優雅な歌である。

半月を過ぎ、丸みを帯びた十日の月。月面と宇宙のやみとの境で、山脈に抱かれた「虹（にじ）の入り江」が朝を迎える。クレーターの外輪山が宝石の弧（アーク）のように輝きを増すと、やがて入り江にも光が差し、溶岩平原のしわが浮き彫りになる。

「虹の入り江」とは、その美しさにふさわしい命名ではないか。月の地形に初めて名前をつけたのは、十七世紀に月の地図を最初に作ったランングレヌスという学者。月の名所には、ニュートンやパスツールら高名な学者の名前も連なっている。

（文・川上紳一、カメラ・白尾元理＝写真家）



漆黒のやみとのはざまに、虹の入り江（中央斜め下）が浮き立つ